

①創世記2章の創造物語の関心は人間である。他の被造物を軽視しているのではなく、注目点を人間に移していくのである。

創世記1章を読んで2章に移ると、「あれ、また別の創造の話？」と思います。しかし2章はむしろ3章と関係しています。全ての被造物の中でも、いよいよ人間が取り上げられて行くのです。この箇所での主なテーマは、神様から人間に与えられる「務め」「許可」「禁止」の3つにまとめられます。「務め」とは土(5)、エデンの園(8)を耕し守ること(15)です。「許可」とは食べるに良い植物を多く与えて下さり(9)、それを食べて良いと許可して下さったこと(16)です。そして「禁止」とはただ一本だけは食べてはならないと禁じられたこと(17)です。神様は人間を造られた時に、「何によって生きられるのか(許可と禁止)」と「何のために生きるのか(務め)」の二つのことを示し与えて下さったのです。3章の話は、人間がそれを忘れてしまうときにどうなるかを問題にしています。

②エデンの園を耕し、守ること。聖書は、それが神様から与えられた人間の務めだと教える。今こそ立ち帰るべき重要な教えではなからうか。

ドイツの旧約学者ヴェスターマンの言葉。

「耕し、守る」という言葉の組み合わせは、保護することのない耕作では、人間が創造主から受けた委託に応えられないことを表現している。大地とその諸力を浪費し濫用することは、創造主からの委託を軽視することであり、ついには大地を人間にとって害あるものにせずにはおかない。もし人間が、彼に委ねられた大地を荒廃させ汚染しているとすれば、人間は神から守るように託された生活空間を破壊しているのである。」(『創世記』I,C.ヴェスターマン著 教文館 P.61)

この本が書きあげられた一年後にチェルノブイリ原発事故が起きました。ドイツの脱原発方向への転換に、彼を含む神学者らの聖書の読み直しが影響したであろうことは前にお話ししました。この日本でも、キリスト者であるなしを問わず、全ての人が悲しみ苦しみを乗り越えてこれからも取り組んでいきます。その中であって、私たち信仰者は取り組む方向性とその理由を聖書から聞き取れる恵みの中に置かれているのだと思います。正しく深く聞き取って取り組んでいきたいものです。